

仲新城誠 「国境の危機」とは（11回連載）
八重山日報 2013年7月2日～15日（抜粋）

<https://www.yaeyama-nippo.com/2013%E5%B9%B4/2013%E5%B9%B47%E6%9C%88/>

7月2日「国境の危機」とは① 仲新城 誠

八重山日報の仲新城誠編集長は6月、関西仏教懇話会（大阪）と日本会神奈川横浜支部総会で講演し、八重山が抱える国境問題を紹介した。両講演の内容を一つにまとめ、加筆修正して紹介する。

現場主義

まず八重山諸島についてご説明します。石垣市、竹富町、与那国町の1市2町から構成されている島々です。石垣市とは石垣島と尖閣諸島のことです。尖閣問題が今、いろいろマスコミで取りざたされていますが、その意味では日本で今、一番ホットな地域かも知れません。東京までの距離は約1957キロですが、台湾（基隆）までは約277キロしかありません。

竹富町は9つの有人島、7つの無人島から構成されています。このうち波照間島という島は、日本最南端の有人島です。ちなみに無人島は東京都の沖ノ鳥島です。

与那国町は与那国島のことです。1島1町です。日本最西端の島で、晴れた日には島から台湾がうっすら見えるそうです。まさに国境の島ということになります。

沖縄のマスコミについても紹介します。

沖縄には、県全体をエリアとする「県紙」が2紙あります。発行部数は二つあわせて約30万部です。八重山諸島には、八重山をエリアとするローカル紙が2紙あります。一つが私たち八重山日報で、発行部数は約6千部。もう一つの新聞が発行部数は1万4千部ほど。また、宮古にも2つの新聞社があり、発行部数はそれぞれ1万5千部ほどだそうです。つまり、私たちは県内で最も弱小な新聞社です。規模といい、紙面の内容といい、人材といい、あらゆる面で私たちは他紙に圧倒されている状況です。経営状況もかなり厳しく、私たちは頑張るうちに頑張らないといけない、と思っています。

このように私たちは弱小ではありますが、これだけは他紙に負けない、とプライドを持っている点があります。それは「現場主義」ということです。現場の光景を見て、現場の声を聞いて、現場のにおいをかいで、現場の土を踏みしめる、ということです。

私は記者になって14年になりますが、会社に入りたてのころ、先輩から強く言われたことがありました。「話を聞くときは、電話では聞くな。必ず相手の所に足を運んで、直接話を聞け」。つまり、直接足を運んで取材するのと、電話で取材するのとでは、読者に伝えられる内容がまるで変わってくる、というのです。

私たちは小世帯の新聞社ですが、常に現場主義に徹することをモットーにしています。今、尖閣諸島問題、与那国町の自衛隊配備問題、教科書採択問題など、国境の島をめぐるさまざまな問題が起きており、それは本土の新聞でも報道されていますが、本土の新聞記者は八重山には常駐していません。電話で現地の人に話を聞いて、記事にするほかないのです。

その点、われわれは、国境の島々で何が起きているか、生の声を本土の皆さんに伝えることができると思います。大変責任の重い仕事ではありますが、やりがいも感じます。今日は、私がじかに見た国境の島々の現状、国境に迫る危機を、皆さんにお伝えできればと思います。

7月3日「国境の危機」とは② 仲新城 誠

尖閣諸島問題の現状

まず尖閣諸島問題です。

今から1カ月ほど前の5月13日、私は尖閣諸島周辺に行ってきました。

尖閣諸島周辺には、連日のように中国公船、つまり中国の海洋監視船や漁業監視船が「パトロール」と称して徘徊している現状があります。いったい尖閣周辺はどうなっているのか、この目で確かめたいという思いがあったのです。

釣りを企画したのは、尖閣諸島にこれまで16回の上陸経験がある石垣市議の仲間均さんです。同行したのは、石垣市議会議長の伊良皆高信さんや、八重山の隣になる宮古島市の市議さんたちでした。

7月4日「国境の危機」とは③ 仲新城 誠

中国公船との攻防

海保の巡視船が私たちと海監の間に割って入り、接近を阻止しました。巡視船と海洋監視船が衝突するようなことがあれば大事件ですから、中国公船もそこまではしません。私たちの船に近づこう、近づこうとはしているんですが、巡視船が間にいるので、さすがにためらっているようでした。

それでも、気がつくとも海監の3隻は、私たちの前方と左右に迫っていて、ちょうど私たちを包囲する体制を取っていました。彼らとしては、中国領海内で不法操業している漁船を発見して、逃げられないように取り囲んだ、ということです。

7月5日「国境の危機」とは④ 仲新城 誠

棚上げ論

棚上げ論は日中国交正常化ごろに中国が言い出したのですが、日本側は中国のペースにうまく乗せられた感があります。

日中国交正常化当時は冷戦時代であり、日中の力関係も、まだ日本優位でした。日本が施設整備に動くのであれば、そのタイミングだったでしょう。国際関係というのは最終的には力関係ですから、有利な時期にやるべきことをやっておけば、相手は何だかんだ言っても、引っ込まざるを得なかったはずです。アンフェアと言われるかも知れませんが、それが国益を守る決断だったと思います。

7月6日「国境の危機」とは⑤ 仲新城 誠

強盗と対峙

そして中国は今こそ、本腰を入れて尖閣を取りに来ています。八重山に住んでいると、そのことがよく分かります。地元の石垣市議会は尖閣問題で2008年から今年までの5年間で、中国に6回の抗議決議を行っています。中国の横暴は、経済力や軍事力の発展と呼応して激しくなっているのです。日本政府の尖閣国有化は昨年でしたが、私たちから見ると、国有化は尖閣問題の深刻化とは何の関係もありません。

7月8日「国境の危機」とは⑥ 仲新城 誠

伊舎堂中佐の業績

ところで現在、石垣島では終戦記念日の8月15日に特攻隊の顕彰碑が建立されます。戦後68年、このタイミングで特攻隊の顕彰碑が建立されるのは、全国でも石垣島しかないでしょう。

顕彰される特攻隊員は伊舎堂用久中佐という人で、石垣島出身です。1945年3月26日、沖縄戦の特攻（特別攻撃）第一号として石垣島を飛び立ち、彼が指揮する飛行隊など計10機とともに慶良間諸島沖で米軍空母に体当たり攻撃を敢行しました。中佐は当時24歳でした。

7月9日「国境の危機」とは⑦ 仲新城 誠

与那国町の自衛隊配備問題

次に、与那国町の自衛隊配備問題を取り上げたいと思います。

与那国島は日本最西端の国境の島です。ここへ陸上自衛隊の沿岸監視部隊を配備しようという計画が、数年前から具体化しています。

防衛省は与那国島だけでなく、八重山諸島全体が「防衛の空白地帯」だと指摘しています。武装した自衛官が一人もいないのです。与那国島の住民でも、安全保障に対する意識が高い人は、そのことを非常に心配しています。たとえば今、急に中国の人民解放軍が大挙して上陸してきたらどうなるか。冗談ではなく、与那国町は2人の警察官が、2丁の拳銃で戦わなくてはならないと言われています。

7月10日「国境の危機」とは⑧ 仲新城 誠

第2の尖閣諸島

そもそも尖閣諸島には戦前までカツオ節工場があり、一時は200人もの従業員が住んでいました。古賀さんという人が事業をやっていたので「古賀村」と言われたこともあります。1940年（昭和15年）に古賀さんの息子が事業継続を断念して撤退したので、無人島になったのです。もし尖閣に日本人が住み続けていれば、中国も領有権を主張することなどできなかったでしょう。

国境に日本人が住み続けることが最大の安全保障なのです。国境が堅く守られれば、内側

にある本土も安全です。逆にいえば国境が危機にさらされた時、その危機を見過ごしていると、時間差で、本土にも及んでくるのです。

7月12日「国境の危機」とは⑨ 仲新城 誠

危機の芽

これまで話したことからもお分かりだと思いますが、日本の危機は、まず国境の危機という形を取って現れます。国境の危機を、まだ小さい芽のうちに食い止めないと、危機は現実の脅威になり、国境が侵食され、次は本土に危機が迫ります。私は日本の安全保障の危機が、国境という地域に凝縮された形で現われているのだと思います。

この国境の島々の危機に、日本がどう対処していくか。そこから、日本の将来像が見えてくるんじゃないでしょうか。今までのようになあなあの対応をしていけば、いずれ尖閣は奪われ、与那国島は無人島と化し、国境は他国の支配下に置かれます。そうなると、沖縄本島も脇腹に刃を突き付けられたような形になり、陥落するのも時間の問題です。

7月13日「国境の危機」とは⑩ 仲新城 誠

八重山の住民は防人

3月には国際線を持つ新石垣空港も開港し、アジアの玄関口として、さらなる飛躍が期待されています。本土との距離も近くなりました。石垣と東京は3時間の直行便で結ばれています。LCC、格安航空会社も就航し、旅行の敷居も低くなりました。

全体として、住民がこれだけ平和で、豊かで、自由な生活を営むことができるのは、まぎれもなく、私たちが日本国の一員であるからです。遠い辺境の地であった国境の島まで、繁栄の波で覆い尽くされているというのは、日本という国の素晴らしさ、日本がこれまで歩んできた道が間違いではなかったことを示すものです。

7月15日「国境の危機」とは⑪ 仲新城 誠

本土の人たちにもお願いしたいことがあります。国境問題に関心を持ってほしい。国境に人が住むことによって国境が守られ、国境が守られることによって本土が守られているという事実に思いをはせてほしいということです。もし国境の島々がおかしなことになっているのであれば、遠慮なくご意見をいただきたいし、叱咤激励していただきたいと思います。